

平方亮三さんを 函館に訪ねる

去る6月25日、平方亮三さんを函館の自宅に訪ねました。ナガサキ原爆版画展(7月23日)の版画をお借りするためでした。

平方さんは4歳の時長崎矢の平の自宅で母とともに被爆。姉兄も全員被爆しています。母はとつさにフトンをかぶせて平方さんを守ったそうです。翌日親戚を探しに母と爆心地近くを歩き二次被爆、頸椎にも障害を抱えています。ただ幸いに大きな後遺症はありませんでした。高校卒業後叔父を頼って函館ドッグへ。室蘭・札幌でも勤務しました。

函館に来た頃から棟方志功らが始めた日本版画院に所属し版画の制作に励みます。そして「核



《展示作品》

- 細胞(1965)
- 作品 - 67R(1967)
- 憬(1986) 塊(1987)
- 焱焱(1989) 胎(1991)

シリーズ」など多くの作品を制作してきました。今年六月の日本版画院展では文科大臣賞を受賞しています(写真)。

本人は版画と被爆を結びつけることを嫌いますが「核シリーズ」はまぎれもなく4歳の時の被爆が原体験です。圧倒的な迫力で見ると訴えかけます。平方さんの版画はいまも進化しています。板木を使いながらも様々な技法を取り入れ、抽象度はいつそう進んでいます。「棟方志功だつて次々と形を壊していったものね。たえず変革が必要だ」と言います。

核兵器禁止条約の発効を素直に喜んでいます。ただ「日本政府は何を考えているの。唯一の被爆国が先頭に立たずにどうするの。おかしいね。この立場は日米安保とは別だと思ふんだ」とあつく語っていました。80歳とは思えないほど若々しくお元気でした(北明)。

コロナ禍のなか 会館からオンライン配信

コロナの感染拡大が少し収まりかけたとはいえ、以前のように行動することができません。そこでヒバクシャ会館を訪問する皆さんはいろいろな工夫をしています。

4月24日に道民教(北海道民間教育研究団体協議会)の春の学習会(午前の部)がヒバクシャ会館訪問の形で行われました。参加した学生たちを前に展示品や会館の成り立ちを説明し(写真)、展示された絵本原画の中で長崎の被爆者が体験を話す、それをスマホで撮影し全道の会員に配信するのです。

つまり実況中継です。こうすると一か所に集まらなくても参加者は同じ学習ができるのです。コロナ禍のなか、「密」を避けるために、学校の授業や講演会などがこの形(ZOOM)などを使ったオンライン配信)で行われるようになったのと同様です。

6月20日にも道民教が展示説明等をフェイスブックに流して仲間知らせ、学びをつくる会(全国組織)にも一部分を流しま



した。

8月3日には、コープさっぽろの組合員活動委員会の皆さんが会館を訪れます。コロナ禍のため今年はヒロシマ等のスタディツアーができなかったため、会館訪問の様子を全道各地に流して学習します。

コロナ禍のなか様々な工夫がなされています。

来館者ノートより

来館して良かったです。改めて原爆のおどましさを感じました。この会館の記録は、もつと日本、世界に発信していかなければならないと思います。後世に語り、残していかなければならないです。

す。(2/9)

原爆は恐ろしいと思います。このような写真や資料を見る度に思います。しかし、私たちはその体験をしていないので、その苦しみを実感することは出来ません。

これからの戦争は核戦争だと言われています。まさに人類が滅亡してしまうような最終戦争です。そのことを世界各国の人たちはどれだけ認識しているのでしょうか。いまだに宗教の違いや経済的、風土的、思想的な利害関係で、世界のどこかの国で内乱や戦争が繰り返されています。これからの国家間の争いは、一国以外にも(波及し)、人類をも滅亡させてしまうことをしっかり認識し、宗教や人種などの差別意識をなくして、人と人がしっかりと認め合い、あるいは武器ではなく、言葉を用いてお互いが理解していくまで……議論しあいながら協議の道を歩んでほしいと思います。

こうした最終戦争を防止するためにも、広島や長崎などの原爆と被爆者に関する資料が役立つていくことを心から願っております。

T・H